

てこな・ミュージック・ジャーナル

標題が語る エピソード

■「ボナパルト」

血気盛んな19歳のときフランス革命を経験したベートーヴェンは、ナポレオン軍の破竹の勢いを目の当たりにしました。一介の兵士に過ぎなかったナポレオンは、革命戦争によって連戦連勝。勢いを得てフランス軍を率いる統領となり、ついにはヨーロッパ制覇を目論むほどの力を得て、ナポレオン法典、そして皇帝へと上りつめていったのです。長い貴族支配の世が大きく転換していくことに多くの人が希望を抱き、市民社会の発展を夢見たのはベートーヴェンも同じでした。交響曲第3番「英雄」はナポレオンの台頭と没落を経験したベートーヴェンならではの心情変化が、その命名の背景にあります。完成した当初楽譜には「ボナパルト」と記されていました。ベートーヴェンは作品の多くを貴族たちに献呈して、そこから収入を得ていますが、この場合は、糧を期待しての献呈ではありません。いわば、自分たちの時代を新しくしてくれる、まさにヒーロー誕生、ナポレオン賛歌表明としての命名だったのです。

■失望と「英雄」

ナポレオンは失脚したのちも、人々の記憶に強く残っていました。その影響は文学にもおよび、例えばスタンダールの「赤と黒」の主人公ジュリアン・ソレルも密かにナポレオンへの憧れを胸に抱き、しがたない書生からの成り上がりを夢見しています。その英雄的な姿は絵画にも残され、ナポレオンのお抱え画家ダヴィッドの手による馬に乗った勇壮な「アルプス越えのナポレオン」、あるいは「戴冠式」が有名です。このような猛々しい姿は、当時の人たちが次々に報じられる勝利宣言に酔いしれたことを容易に想像させます。ですからベートーヴェンも「ボナパルト」の名に憧れたのでしょう。でも軍人としての最高権力を手にすると、1804年、ナポレオンはあるうことか皇帝の座までも手に入れることにしました。やはり王になろうとするナポレオンの俗人振り。ベートーヴェンは裏切られたと失望し、「ボナパルト」と記した楽譜の表紙を破り捨てました。ヒーローへの憧れは夢と儚く消えたのです。出版に際しては「シンフォニア・エロイカ 一人の英雄の思い出を祭るために作曲された」といった言葉を書き入れました。

市川市文化振興財団 文化芸術専門員 小坂 裕子

■「驚愕」

ベートーヴェンの先生ハイドンは、主従関係に縛られて苦勞することがあったようです。有名な例が、いわゆる「びっくりシンフォニー」、交響曲第94番「驚愕」です。第二章で突然ティンパニーのフォルテ音を鳴り響かせ、音楽を子守唄がわりにうつらうつらしている人々を起こしました。今も時に演奏会でいびきをかいている人の隣になってしまったわが身の不幸を嘆くとき、私は楽長ハイドンのようにユーモアでもって、その眠りを妨げてほしいと心から願います。

■「狩」

そのようなハイドンの交響曲は107番までありますが、「朝」「昼」「晩」「ホルン信号」「告別」「受難」「狩」そして「奇跡」といった標題が並びます。そのほとんどが曲想への親近感から後世につけられた愛称です。「告別」は良く知られているエピソードの通りに、なかなか故郷に帰れない楽団員の気持ちを主人エステルハージ公にアピールするために作られました。奏者が一人ずつ、舞台から去っていくという楽長ハイドンのユーモアが感じられます。「狩」はまさに貴族たちの最大の楽しみを想像させます。何頭もの馬を連ねて犬を放って狩をする、合図は勇ましいファンファーレ。馬も犬も一斉に走り出し、獲物をつぎつぎと仕止めたときの一同の興奮。たくさんの獲物を持って帰館すると、イノシシから小鳥にいたるまで、肉料理が大皿の上に山と積まれ、10数種類の料理が次々と運ばれ、延々と続く大宴会になったとのことでした。

■「奇跡」「時計」「太鼓連打」

1792年にハイドンが指揮をしようとして舞台上に現れたそのとき、天井のシャンデリアが落下してきたという恐ろしい事件がおこったそうです。会場が騒然となって人々が逃げ惑うなか、二人が軽い怪我だけですんだので、交響曲第96番は「奇跡」と呼ばれるようになったとか。第101番「時計」、第103番「太鼓連打」、これらは説明の必要はないでしょう。動物も題名に使われています。例えば「牡鶏」は第83番の交響曲で、第1楽章第2主題が、牡鶏の声に似ているからです。とりわけ目を引く呼び名といえば第82番の「熊」でしょう。交響曲に相応しくないようにも思いますが、終楽章の低音部が熊のうなり声のようだと誰かがある日言いだして、狩に夢中の音楽好きたちに大うけのニックネームになったのでしょうか。時代を生きた音楽家たち、曲名とともに彼らの日常を探るのも興味深いですね。